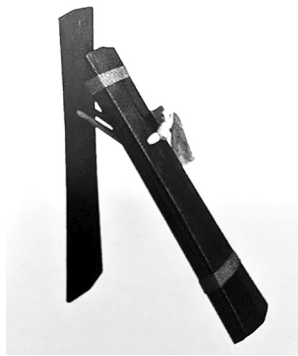


# 文物が語る音の世界—リズムを刻む拍板—

リズムを刻む楽器として、中国音楽に欠かせないものの一つに拍板<sup>はくばん</sup>がある。それは、複数の板を紐で結びあわせた楽器で、外側の2枚の板をもって中の板を挟み合わせるように打って音を出す。瀧遼一『中国音楽再発見 楽器篇』（第一書房、1991年、59頁）には、「現今、演劇、葬式および街道芸人もこれを使う」と



唐代の拍板

ある。1904年生まれで、1938年に旧満州へ調査に行かれた瀧氏が「現今」といわれるのは、中華民国時期の中国のことであろう。しかし現在でも拍板は左図のように京劇でも主要な打楽器（徐城北『見て読む中国 京劇の世界』（東方書店、2006年、60頁）である。では、拍板はいつごろから用いられていたのだろうか。

文献を見てみると、拍板が楽器として確かに使われるのは唐代からのようだ。唐代の音楽書『楽府雜錄』には、「拍板」の条があり、玄宗に付き従う戯言を得意とした俳優の黄幡綽と、玄宗とのやりとりのなかに以下のようにみえる。

拍板にはもともと楽譜はなかった。玄宗は黄幡綽に命じて楽譜を造らせた。黄幡綽はなんと紙に二つの耳を書いてそれを献上した。玄宗がそのわけを尋ねると、「ただ耳がしっかりしていれば、リズムを誤ることはないのです」と答えた。

唐代中期には、拍板という打楽器が、リズムを刻むために用いられていたことは明白である。

唐代の音楽が記された『通典』巻146 楽6には、「散楽」の説明に「横笛一、拍板一、腰鼓三」を使うとある。注目されるのは、メロディ楽器が横笛一管であるのに対して、リズム楽器が拍板一揃えと腰鼓が三張りという、打楽器を中心とした構成であったことである。この「散楽」とは、遊興のための芸能で、『通典』では「だいたい散楽雑戯には幻術が多く、幻術はすべて西域由来のものが多く」との説明がある。その幻術とは、手足を切断したり、内臓を取り出したり、鋭利な剣のうえで踊ったりと、さながらいまの手品やサーカスマagicのようであった。そのなかに用いられた拍板は、腰鼓とともに、そのスリリングな演技を盛り上げる役割を果たしていたであろう。そのつくりについても、『通典』巻144 楽4に、10枚あまりの木を重ねて<sup>なめしがわ</sup>草で<sup>う</sup>連ね、それを<sup>う</sup>撃つことでリズムを刻むとの説明もある。

## 唐詩に詠われた拍板

朱湾「詠拍板」（『全唐詩』巻306）

赴節心長在	赴節 心 長に在り
従繩道可観	従繩 道 観るべし
須知片木用	須らく片木の用を知るべし
莫向散材看	散材に看る莫かれ
空為歌偏苦	空しく為せば 歌偏に苦しく
仍愁和即難	仍りて愁う 和すること即ち難きを
既能親掌握	既に能く親から掌握す
願得接同歡	願わくは同歡に接するを得ん

ただ単にサーカスを盛り上げるためだけの楽器であれば、中唐詩人朱湾によって取り上げられることもないであろう。「赴節」という冒頭のことは、リズムを刻む楽器として中唐にすでに認識されていたことが次のようにうかがえる。拍板を「散材」つまり役に立たない木切れと見なすことのないように。それをむだに打てば、合わせて歌うのがとても苦しい、それで拍板の拍子と歌が和することが困難ではないかと心配する。しかしすでに拍板をマスターしている私は、宴にある人々と享樂をともにしたいと思う。そのように詠じられている。

そういえば、敦煌莫高窟<sup>ぼつこうくつ</sup>の壁画のなかに、「拍板」が多く表われてくるのは、中唐以降のようである。拍板が20以上描かれている窟としては、莫高窟の中唐制作の231窟・晩唐制作の138窟・五代制作の146窟などであり、初唐以前の窟には基本的に描かれていないようである（『敦煌樂舞大典』上海音楽出版社、2022年）。これも「拍板」が中唐ころから用いられるようになっていくことを傍証している。

## 五代の王建墓の楽人レリーフ

五代の前蜀の王建（847～918）の墓石の棺床部の周囲に施された楽人のレリーフがある。高さは84cm、長さは7m 54cmで、南面に4体、東西両面に10体ずつの計24体からなる。南面に、拍板奏者1名と舞人2名と琵琶奏者1名と、舞人を挟んで琵琶と拍板という構成で目立つ場所に据えられている。東面10体の楽伎のうち、都曇鼓・鼓・腰鼓・拍板・羯鼓・鷄婁鼓と鼗鼓（1名で担当）<sup>どうろうこ</sup>・答臘鼓・毛員鼓と8体が、西面10体の楽伎のうち、羯鼓・銅鈸と2体が打楽器奏者である。つまりは24体のうち11体、半分弱が打楽器奏者ということになる。なかで拍板と羯鼓だけは2体あり、拍板は、他の打楽器とは別扱いともいえよう（『中国音楽史図鑑』人民音楽出版社、1988年、92～96頁参照）。



宋代の拍板

先の瀧遼一『中国音楽再発見 楽器篇』には、拍板は「宋の時代に最も重視された楽器である。拍子を取るために用いる」とある。宋代は曲に合わせて歌詞をつくる文学的営みが文人士大夫の間に浸透した。そのため、簡便にリズムを取る拍板が重宝されたのかもしれない。拍板を手にして歌唱するといった記載が散見する。宮廷のなかで宴饗音楽を司る教坊でも、拍板は重要な打楽器として位置づけられていた。北宋の都開封の繁栄を記した孟元老『東京夢華錄』巻9によると、10月12日には、宰相・執政・親王・皇族・百官が祝賀の礼のために参内する。その儀礼には、大遼・高麗・西夏の祝賀使節も殿上に着座し、それぞれのテーブルの前にはご馳走がならべられる。装束を身に着けた教坊の楽部は、舞台の下の色絹で飾った場にいらんでいる。その最前列に拍板十揃いが一列にならび、つぎに琵琶が五十面ならぶ。それは舞や雑技や雑劇の伴奏を行なうためなのである。五代の王建墓のレリーフにあった琵琶と拍板は、北宋の宮廷宴饗音楽においてもメロディとリズムの主軸であった。